

目 次

1	活動概要	1
2	参加者一覧	2
3	行程表	3
4	被災地での活動報告	
	• 地域創生班	5
	• 防災班	19
	• 精神的ケア班	29
5	各リーダー総括	41
6	ご支援、ご協力いただいた方々	46

1 活動概要

活動期間 平成27年8月18日(火)～24日(月) 6泊7日

参加人数 学生48名、教職員5名 計53名

活動場所 宮城県(石巻市、気仙沼市、南三陸町、山元町など)

主な活動内容

- ・上山八幡宮参拝および神主による講話
- ・南三陸町椿プロジェクトでの清掃活動
- ・南三陸町での民泊体験
- ・南三陸町漁業ボランティア
- ・気仙沼仮設住宅の清掃および住民の方々との交流
- ・面瀬小学校の児童との交流
- ・石巻語り部研修
- ・石巻専修大学とのワークショップ
- ・山元町での農業体験
- ・山元町語り部研修
- ・山元町でのイベント参加 など



参加者一覧

平成27年度東日本復興支援プロジェクト参加者

地域創生班			
学部・学年	氏名	フリガナ	性別
人文学部歴史学科2年	酒井 悠圭	サカイ ユカ	女
人文学部英語学科1年	村上 綾	ムラカミ アヤ	女
人文学部東アジア地域言語学科1年	永田 翔一	ナガタ ショウイチ	男
法学部法律学科3年	藤崎 一起	フジサキ イチキ	男
法学部法律学科2年	岩下 江里	イワシタ エリ	女
法学部法律学科1年	島本ゆりあ	シマモト ユリア	女
法学部法律学科1年	中川 隼人	ナカガワ ハヤト	男
法学部経営法学科3年	井上 大使	イノウエ タイシ	男
法学部経営法学科2年	大野 珠美	オノ タマミ	女
法学部経営法学科2年	重富 仁太	シゲトミ ジンタ	男
経済学部経済学科4年	岡野 洋貴	オカノ ヒロキ	男
経済学部経済学科3年	入江 隼輔	イリエ シュンソウ	男
経済学部経済学科2年	中村 嘉希	ナカムラ ヨシキ	男
経済学部経済学科2年	黒岩 愛佳	クロイワ ノリカ	女
商学部第二部商学科3年	市園 拓也	イチノノ タクヤ	男
理学部物理科学科1年	青木 周	アオキ アマネ	男
工学部建築学科3年	平 牧子	タイラ マキコ	女

防災班			
学部・学年	氏名	フリガナ	性別
人文学部日本語日本文学科3年	佐竹 藍	サタケ アイ	女
人文学部歴史学科2年	岸田 拓海	キシダ タクミ	男
法学部法律学科3年	姫野 廣大	ヒメノ コウダイ	男
法学部法律学科1年	桃原 里佳	トウバル リカ	女
法学部経営法学科2年	光富 愛菜	ミツトミ アイナ	女
経済学部経済学科3年	三嶋 弘樹	ミシマ ヒロキ	男
経済学部経営法学科2年	村中 圭吾	ムラナカ ケイゴ	男
経済学部産業経済学科3年	岸原 悠	キシハラ ヨウ	女
商学部商学科3年	中島 佑香	ナカシマ ユカ	女
商学部経営法学科3年	新川 愛実	シンカワ アミ	女
理学部化学科2年	池田 駿	イケダ ハヤオ	男
工学部機械工学科2年	栗原 瞭	クリハラ リョウ	男
工学部電気工学科2年	山本 昌弥	ヤマモト マサヤ	男
工学部電子情報工学科1年	宮園 大輝	ミヤノ タイキ	男
工学部社会デザイン工学科2年	石川 祥太	イシカワ ショウタ	男
薬学部薬学科4年	坪田 悠希	ツボタ ユキ	女

精神的ケア班			
学部・学年	氏名	フリガナ	性別
人文学部文化学科2年	小川 浩貴	オガワ ヒロキ	男
法学部法律学科3年	岡村 啓汰	オカムラ ケイタ	男
法学部法律学科3年	手島 直紀	テシマ ナオキ	男
法学部法律学科3年	荒木 賢一	アラキ ケンイチ	男
法学部経営法学科2年	飯開 まみ	ハンガイ マミ	女
法学部経営法学科2年	塩先 紗弓	シオサキ サユミ	女
法学部経営法学科2年	松島英里奈	マツシマ エリナ	女
経済学部産業経済学科3年	横山ひかり	ヨコヤマ ヒカリ	女
商学部商学科3年	寺田 一輝	テラダ カズキ	男
理学部物理科学科2年	荒巻 昂	アラマキ タカシ	男
医学部看護学科1年	松崎 夏生	マツサキ ナツキ	女
薬学部薬学科6年	岩田 瑞希	イワタ ミズキ	女
薬学部薬学科3年	竹下 舞夏	タケシタ マイカ	女
薬学部薬学科1年	岸 由美子	キシ ユミコ	女
スポーツ科学部健康運動科学科2年	村上 静香	ムラカミ シズカ	女

引率者		
所属	氏名	性別
学生部長	小野寺一浩	男
人文学部教授	佐藤基治	男
学生課長	篠崎博	男
学生課員	江種幸太郎	男
学生課員	田中健太郎	男

3 行程表

東日本復興支援プロジェクト 各班スケジュール

・派遣期間：平成27年8月18日(火)～24日(月) 7日間

【地域創生班】 男子10人、女子7人

日程	8月18日(火)	8月19日(水)	8月20日(木)	8月21日(金)	8月22日(土)	8月23日(日)	8月24日(月)
午 前	10:30 仙台へ出発 12:20 仙台到着	9:00 ①神崎崎草刈りボランティア	12:00 民宿 解散式 12:00出発	8:30～15:30 ⑤南三陸町ボランティアセンター 漁業ボランティア	10:00～17:00 ⑦石巻ピースボートセンター 見学およびワークショップ	10:00～11:30 石巻語り部バス研修	9:30出発
午 後	16:00 上山八幡宮(南三陸) 防災庁舎跡見学 南三陸(観洋)宿泊 (田中)	15:00 ②民泊体験 南三陸(観洋)宿泊 (田中)	13:00 ③さんさん商店街 ポータルセンター ④奇跡の一本松 見学 南三陸(観洋)宿泊 (田中)	16:30 ⑥さんさん館での講話 南三陸(さんさん館)宿泊 (田中)	⑧石巻(清和荘)宿泊 (佐藤・篠崎)	14:00～17:00 ⑨石巻復興支援ネットワーク ワークショップ 東北学院大学泊	12:05 福岡へ出発 14:05 福岡到着

【防災班】 男子9人、女子7人

日程	8月18日(火)	8月19日(水)	8月20日(木)	8月21日(金)	8月22日(土)	8月23日(日)	8月24日(月)
午 前	10:30 仙台へ出発 12:20 仙台到着	9:00 ⑩構造物プロジェクト (上山八幡宮)	8:30～15:30 ⑪南三陸町ボランティアセンター ター 漁業ボランティア	10:00～17:00 ⑫面瀬小学校訪問 (気仙沼)	8:45～9:45 ⑬南三陸語り部バス研修 10:30～11:30 伊里前福幸商店街	10:00～12:00 ⑭気仙沼仮設住宅訪問 (南蔵知)	9:30出発
午 後	16:00 上山八幡宮(南三陸) 防災庁舎跡見学 南三陸(観洋)宿泊 (佐藤・篠崎)	13:00 境内清掃 南三陸(観洋)宿泊 (佐藤・篠崎)	15:30 さんさん商店街訪問 南三陸(さんさん館)宿泊 (佐藤・篠崎)	南三陸(観洋)宿泊 (佐藤・篠崎)	13:00～15:00 平成の森(南三陸)にて講話 16:30～17:30 気仙沼語り部バス研修 気仙沼(ひので)泊 (田中)	14:00～16:00 石巻にて語り部ガイド 防災教育のプログラム 東北学院大学泊	12:05 福岡へ出発 14:05 福岡到着

【精神的ケア班】 男子6人、女子9人

日程	8月18日(火)	8月19日(水)	8月20日(木)	8月21日(金)	8月22日(土)	8月23日(日)	8月24日(月)
午 前	10:30 仙台へ出発 12:20 仙台到着	10:00～17:00 ⑮面瀬小学校訪問 (気仙沼)	9:00 ⑰気仙沼仮設住宅訪問 (反松公園、岩ヶ崎公園)	9:00～11:00 ⑱山元町語り部研修 11:00～12:00 講話	9:00～17:00 ⑲イベント手伝い (山元町工房地球村)	9:00～16:00 ⑳イベント手伝い (山元町役場)	9:30出発
午 後	16:00 上山八幡宮(南三陸) 防災庁舎跡見学 南三陸(観洋)宿泊 (小野寺、江種)	15:00～17:00 ⑳石巻語り部研修 仙台(天龍閣)泊 (小野寺、江種)	12:00移動 15:00～17:00 ⑳山元いちご農園 農作業 仙台(天龍閣)泊 (小野寺、江種)	13:00～17:00 ㉑山元いちご農園 農作業 仙台(天龍閣)泊 (小野寺、江種)	17:00移動 仙台(天龍閣)泊 (小野寺、江種)	17:00移動 東北学院大学泊	12:05 福岡へ出発 14:05 福岡到着

② 参加者一覧
③ 行程表

4 被災地での活動報告 ～ 地域創生班 ～



奇跡の一本松

① 8月19日（水） <神割崎キャンプ場での草刈り活動>

二日目は朝から施設を利用する人々が快適に過ごせるよう、草刈りを行った。

鉋を使い坂となっている地面の草を刈っていく。その高さは私たちの身長をも優に超える程であり、流れる汗を拭う暇もないほどの作業量であった。

写真の奥ほどに見える海は、利用する人々にきれいな海を見てほしいとの思いから、木や草を切つての大作業を行った結果、青く広い海を臨むことができたのである。



このキャンプ場は広大な敷地面積があり、私たち地域創生班17人全員の労働力をもってしても大変な作業量であるのにも関わらず、キャンプ場を管理する人は3人であった。このような人手の不足はボランティア中に随所で見られた。

若い労働力人口の流出は大きな問題であり、震災の復興ともリンクして考えていかなければいけない問題である。今まで東北の地を守り、歴史を築いてきた人々とこれからの東北を創っていく人々が共存し得てこそ、『復興』といえるのではないだろうか。

今回の草刈りボランティアを通して、ボランティアとはいったい何なのかを今一度考えさせられた。震災に遭って直ぐの瓦礫を撤去したり、物資を届けたりすることをボランティアと捉えがちなが、震災後の復興へ向けた断続的な支援や労働力の提供など未来へ向けたボランティアを、我々は目指すべきである。

法学部1年 島本ゆりあ



② 8月19日（水）～8月20日（木） <南三陸町での民泊体験>

・フランクさん宅

私たちは Frank さんの家庭にお世話になった。活動内容として、ライフラインが切断されても生きていくことができるという山小屋生活の体験、等間隔に切られた薪を坂の上にある山小屋まで運ぶ作業のお手伝いをさせていただいた。

この民宿での活動は、他の活動と違って家族の方と触れ合う時間が長かった。そのため、お話しを伺いやすく、震災後のリアルなお話だけでなく南三陸の自然についても知ることができた。

復興事業に関わるトラックのマナーの問題。子供たちの通う小学校が少なくなったことで遠くの小学校までいかなければならない不便性。たくさんの木が切られているのは、津波の影響だけでなく、育てる人が減り、すべての木に目が行き届かなくなってしまったからであるということ。放射線濃度を測る機械をある地域では、配布されるのではなく、自分たち自身で買わなければいけなかったことなど、私たちの知らなかったお話をたくさん聞くことができた。また南三陸町の人と自然のぬくもりも感じることもできた。



法学部2年 大野珠美、経済学部2年 黒岩愛佳
法学部1年 島本ゆりあ、人文学部1年 村上綾

・三浦さん宅

民宿では、三浦さんの震災についてのお話、庭の草刈り、その地区での被害と現状を聞いた。



三浦さんのお話

津波被害にあつて改めて避難訓練と救命胴衣の必要性が分かった。訓練の必要性の観点からどの行動によって被災から免れることができるのかということを知っている状況はとても安心するということだった。また、その教訓としてできるだけ高いところに逃げるといふことと災害用プラカード、救命胴衣が必要であることも聞かされ、特に救命胴衣には個人情報を入力しておくことによりどのような状況（例えば本人が気絶している場合）でも情報提供ができる。また、保温性があり凍死を防ぐことができることも教わった。

孫への継承

津波を知らない孫に少しでも怖さと、どれだけの助けで復興したのかを教えその恩を一族で忘れないためにボランティアの方と写真を撮るときは孫も一緒に写し、そのアルバムを作り、大きくなったら見せる。

これも、教訓で被災直後にすぐ駆けつけてくれた人の中に阪神淡路大震災の被災者がおり、その際の恩返しで復興の手伝いがしたいと告げられ、思いついたそう。

庭の草刈り

この体験でボランティアの必要性を考えた。自分たちの考えとして、庭の草刈りをすれば三浦さんの助けになると思い、率先して行ったわけではあるが、本当にそのボランティアがこの東日本復興を掲げている私たちが今絶対やるべきことなのかというのは少し疑問に思った。そもそもの目的が地域創生班の中でも分かれていたことが、草刈り提案の際の迷いにつながったと考える。かつ、この迷いはどこでもできるという条件が加わってしまったことが原因である。

そこで、民宿に泊まる際は、何をさせてもらえるのかの下調べと自分たちが何を求められているのかの考えをまとめていかないといけないと感じた。

もちろん大前提ではあるが、今回のように民宿が分けられてどこに割り振られるかわからない状況も想定しないといけないという意味で、次回の東日本復興に役立てることができるとはかもしれない。



商学部第二部 3年 市菌拓也

・小山さん宅

私たちは、小山夫妻宅に宿泊した。震災当時の状況と今の生活で困っていることについて伺った。最初に、震災当時の状況について報告する。

小山さんの家は、幸い、海から遠いところにあったため流されなかった。そのため、震災後は、約20人の人々を自宅に受け入れたという。小山さんは、自宅に受け入れた人々を次の受け入れ先に紹介する作業も行っていた。そのとき、受け入れ先の良し悪しや度重なる引っ越しでトラブルが起きていた。受け入れ先の評判は、被災者の間で知られていたそうだが、希望先に全員いけるわけではなかった。「少しでもいいところに引っ越したい」「引っ越し疲れから長期で小山さん宅で暮らしたい」と望む人々の対応に追われたそうだ。「そろそろ出て行ってほしい」と思ってもなかなか言えず大変だったと小山さんは言っていた。また、震災後みんなパニックになっていたため、皆、平常心ではなく、トラブルが起きやすい状況だったそうだ。

次に、今の生活で困っていることについて報告する。それは、農業支援である。震災後、南三陸町では、津波の被害が大きかったため漁業支援は漁協から出たそうである。しかし、農業支援は、漁業支援よりも少ないそうである。そのため、流された農業機械の保障はほとんどないと小山さんは言っている。津波によって流された小山さんの農業機械の値段は約120万円であるが、農協から出た補助金は20万円だったそうだ。震災により職を失った人々には、少ない金額だと小山さんは考えていた。



工学部3年 平牧子、人文学部2年 酒井悠圭
法学部2年 岩下江里

③ 8月20日(木) <さんさん商店街・ポータルセンター>



さんさん商店街では管理者の方にお話を伺った。商店街は4年後に移転しなければならないそうである。移転先は盛土の上で人が集まりやすいよう中央付近に集中して商店街やスーパーを設置することが決まっているが、店主の高齢化で移転後に商店を継続する人は少ないようだ。また、住宅はその近辺に作ることを国から禁止されているため、商店と住宅の土地代を負担しなくてはならず、金銭的な問題もかかわってくる。

現在の商店街は8割が地域外の顧客であるため、お土産に力を入れている店と漁業の町であることをPRするため井物にも工夫があり、とても魅力的な商店街であった。しかし、日用品がそこですべて揃うわけではなく、車で40分程度の大型スーパーへ足を運ぶ住人が多数であるため商店街の顧客の2割しか地域住民がいないことも理解した。

また、商店街移転後はその盛土近辺はモデル地区となり、新しい試みであるため先はわからないが現在の商店街のモチベーションの高さに引っ張られる形で住人や役場が動いている状況であるようだ。



④ 8月20日（木） <奇跡の一本松>



元々、約 7 万本の松林「高田松原」であったが、この震災で壊滅的な被害を受けた。その中で残ったこの一本松は、震災後、「奇跡の一本松」と呼ばれ、復興のシンボルとなった。今は人工的な処理を加え、モニュメントとして保存されている。

ホテル観洋では、女将の阿部憲子さんに、震災時のホテル観洋のお話や南三陸町の現状についてのお話を伺った。震災時は、ホテル観洋では避難してきた方々を受け入れ、阿部さんをはじめ、ホテルの従業員の方が対応にあたったそうだ。また、震災後は仮設住宅を巡回するホテルの「観洋ぐるりんバス」の無料運行、高齢者の町民のための無料入浴券の配布、そろばん教室や英会話教室など町の子供たちのための学習支援など、地域に寄り添った支援が続けられているそうだ。加えて、抽選による仮設住宅への移住や町での生活の不便さによる人口流出により、町の経済の立ち直りが遅れているという南三陸町の現状についても教えていただいた。

法学部 2 年 大野珠美

⑤ 8月21日（金） <南三陸町ボランティアセンター>

・鈴木さん

この日は漁業を営んでいる鈴木さんご夫妻の所で昆布結びと縄の紐取りを手伝わせてもらった。

昆布結び

昆布結びはカッターを使い規定の大きさにカットされた昆布を指定された昆布の結び目が綺麗になるような太さに調整し結ぶというとても繊細な作業だった。

縄の紐取り

昆布の養殖をする際、親縄に小さな糸を取り付け昆布の苗を育てる。この昆布の紐取り作業は、その昆布を収穫した後の親縄に残った小さな糸を取るというものだ。単純な作業ではあったが、縄に張り付いている小さな貝類も同時並行で取る際、手袋が摩擦し、作業の最後には摩擦箇所が穴が開いた。

ご夫妻は、大量の作業とは裏腹に二人で切り盛りしている。原因として、漁業関係者の減少が考えられる。津波被害地区の人口減少に相まって、復興期間の延長で移住地域の拡散が顕著であり、手伝い等をなかなか要請できないためだ。しかし、ご夫妻は私たちが考えているよりも元気だった。それは時間の解決やボランティアの活躍などが要因ではないだろうか。



商学部第二部3年 市園拓也

・佐藤さん

宮城県南三町のボランティアセンターを通して漁業体験の昆布結びと養殖縄から種糸を抜く作業を行った。普段わかめや昆布の養殖をされている佐藤長治さんにお世話になった。昆布結びの昆布は、お弁当などに使われるもので紐状の昆布を結んでいき、養殖縄の作業は指だけを使うものだったが、かなりの重労働だった。

作業中に長さんに震災の話を伺うことができた。震災当時、本来なら自宅から車で10分程度のボランティアセンターまで瓦礫のせいで5時間かかった事。やっと支援物資を受け取るためにボランティアセンターに着いたかと思えば、家族5人につきおにぎり一つしか貰えず、なんとかお腹を満たそうと一つのおにぎりをおじやにして食べられたとのこと。また、日本や世界各地から支援物資が届けられたらしいが、南三陸町はヘリコプターの着地が難しく物不足に陥り、例え、物資があったとしても各仮設住宅の人数分なければ廃棄されていたこと。お話を伺っていると、もしあれがなかったら、これがなかったらどういう風にリアルに想像できて今の生活がいかに便利か実感できた。

また、震災後は、東京オリンピック開催が決まったばかりで若い労働者が復興作業よりもオリンピック建設に流れていき、復興が思うように進まなかったそうだ。

私は、宮城県に初めて訪れたが、完ペキではではないもののほとんど復興しているように感じた。しかし、電気や水道などの重要なライフラインはごく最近復興したばかりで、まだまだ満足のいく状態ではないという。さらに、町と市でも復興のために支援される金額に大きな差があり、進行も全く異なる。ニュースや新聞で東日本大震災について知っているつもりだったが、地元の方のリアルな話を伺うと心から被災者の方の心情を理解できていなかったことに気づき、今からでもなにかお役に立てたらと感じた。また長さんは人との繋がりを大切にしていた。「震災でとても辛く苦しい経験をしたが、その分震災が起こらなければあり得なかった人との繋がりができ、それらを大切にしていきたい。」とおっしゃっていた。震災で私達の想像を絶するような経験をされたと思うが、それもプラスに捉え前向きに努力されている長さんに、私は元気をもらった。



人文学部1年 村上綾

⑥ 8月21日（金） <さんさん館>

さんさん館では、語り部の阿部勝善氏から話を伺った。阿部さんからは震災当時の状況を震災から学んだことを聞いた。

最初に震災当時の状況について記載する。阿部さんは山間部に暮らしている。そのため、震災があった次の日に役所から、阿部さんたち山間部に暮らしている人々に対して、炊き出しのお願いがあったという。なぜなら、山間部に暮らしている人々は、農業をしている人が多いからだ。農家では、米約100kg、梅干し約300個は各家庭で保存しているという。そこで、阿部さんたちは、一日おにぎりを1,000個ずつ作り避難所に届けたそうだ。

次に、阿部さんが震災から学んだことについて記載する。それは、地名の意味を知ることである。南三陸町には、過去にきた津波からついた地名がある。例えば、「オオブネ」や「ノコリヤ」である。「オオブネ」は、津波が来たとき、大きな船が流れ着いた場所という意味である。実際、今回の地震でもそこまで船が流れてきたそうである。「ノコリヤ」は、大津波が来た時に残った集落という意味である。このように、地名には、昔の人の警告や町の歴史が込められている。

最後に、阿部さんは、ボランティアにどのようなことを望むかの質問に対して、次のように語った。「現状を見て感じてもらいたい。何か仕事を手伝うと同時に住んでいる人と話して交流を深めてほしい。」震災から4年。まだ復興していないが、時間がたつと同時に人々の記憶からも薄れてきている。現地の状況を見聞した一人ひとり人が、今の状況を説明し伝えることもボランティアの使命だと考える。



人文学部2年 酒井悠圭

⑦ 8月22日（土） <石巻市見学とワークショップ>



石巻市見学

石巻市の見学では、海岸線から一定の距離まで草で覆われている更地であり、余りにも何も無かった。また、流されなかった家々が依然としてその当時のまま残っており撤去する費用の余裕も無く只々そこに存在するままであった。その中でも高盛工事や「がんばろう！石巻」の看板、石巻魚市場などに復興への足がかりや希望を感じた。

ワークショップ

ピースボートのワークショップについてですが、そもそもピースボートとは1983年以来活動する国際NGOであり、“国境を越えた災害支援は、地域や世界の平和をつくる”という理念のもと活動している団体である。

様々な災害支援を通じて得た経験を今回のワークショップで教えながら、私たちに「災害対応」について考えさせてもらった。私たちの日常生活において災害が発生した時の事、その後の事を具体的に想定させて、どのような行動をとりそうか、どのように行動すればいいのか、現実にかきた問題点、その解決策等を話し合いながら「災害対応」を学んだ。

自分自身が被災者になる可能性は人災も含めたら大いにあり、また避難生活を送らなければならないかもしれない。一度でもいいので自身の生活において被災時の事、その後の事を考える必要があると感じた。

理学部1年 青木周

⑧ 8月22日（土） <清和荘>

ボランティア活動を終えた私たちは、宮城県石巻市にある清和荘にお世話になった。

清和荘に到着した私たちを、清和荘の方は温かく出迎えてくれた。そして、すぐに夕食を作ってくださいました。清和荘の方はとても元気な方でニコニコしながら「ご飯たくさんたべてね。」と何度もおっしゃり、私たちを大変気遣ってくださいました。そんな清和荘の方の笑顔と美味しい夕食で一日の疲れを癒された。

次の日、清和荘の方が作ってくださいました朝食を食べ終え、食器の片付けをしている時に私は清和荘の方に震災当時の話を伺ったところ、清和荘の方は震災の当時の津波の事や当時の様子を話してくれた。しかし、なによりも私が驚いたのは、清和荘の方は震災で奥さんを亡くされていた。その話をしてくださる清和荘の方の笑顔が印象的だった。

私は、このボランティアで少しでも東北の方に役に立てればいいなと思っていたが、私はこのボランティアで東北の方にたくさんの事を学ばせてもらい、また生きる力、大きなパワーをもらった。そんな私にできる事は東日本大震災を風化させない事だと思った。引き続きボランティア活動で学んだ事を伝えていこうと考えている。

法学部1年 中川隼人

⑨ 8月23日（日） <石巻専修大学とのワークショップ>

私たちは、宮城県気仙沼市の喫茶店で石巻専修大学の学生方と一緒にワークショップを行った。ワークショップの会場や茶菓子を用意していただいた現地の学生には、本当に感謝している。

私たち地域創生班は、多くの被災地の人々の話を聞き、その中で自分たちと年の近い学生と、これからの地域復興や災害対策などお互いの意見を出し合いながら話をした。話し合いは約二時間と短かったが、話の濃い大変すばらしいワークショップになった。様々な意見が出て、みんなで考えてどうやったらより良い復興が出来るのか、また、震災後に生じた問題（仮設住宅・家族を震災で亡くした親や子ども、復興に使うお金など）はまだ解決はしていないことなど、学生同士で話し合う事により若い人達の意見を聞く事のできる素晴らしい会議になった。



このワークショップを通して思った事は、これは、他人事ではないということ。災害はどこにでも起きること。特に、災害対策について話した時は、「ここで話した事は忘れずに福岡に帰ってもいろんな人たちに伝えてください。」と心から願い、言っていた。あの震災時にもっと災害対策の知識を知っていれば、もっと多くの人達が助かった。ちょっとした些細なこと（地元のハザードマップを見る、非常時のためのリュックサック、避難場所の確認等）が、震災時に命に関わる事に繋がるのかと思った。確かに、自分の住んでいる所の避難所やハザードマップについてなど知らない人が多くいる。私達は今からでも遅くないこの事を、家族や友人など多くの人に伝えなければと考える機会ができた。私たちは、石巻専修大学の方々に強い心と復興への熱い執念を感じた。

経済学部2年 中村嘉希

4 被災地での活動報告 ～ 防 災 班 ～



椿ものがたり椿の避難路

⑩ 8月18日（火）～19日（水） <上山八幡宮>

椿道プロジェクト

私たちは初日と二日目に宮城県南三陸町にある上山八幡宮に訪問した。上山八幡宮で宮司をされている工藤真弓さんから紙芝居を交えて復興状況を教えていただいた。工藤さんが主体となって行われている「椿道プロジェクト」という避難路のお手伝いを行った。「椿道プロジェクト」とは、椿は松などの木に比べ塩水にも強く、頑丈であるため避難路に椿を植え観光客や子供たちにも分かりやすく避難場所への道を示そうというプロジェクトだ。私たちはその避難路の道の椿が元気に育つように除草作業を行った。



境内清掃

9月に上山八幡宮で「復興・秋祭り」というお祭りが開催されるため境内全体の清掃活動を行った。清掃活動を通して上山八幡宮の関係者や子供たちとの交流を深めることができた。

工藤真弓さんのお話

避難所において何もすることがなかった中で、息子さんとマッサージをして回ったそうだ。非日常の中の日常で、避難所の人たちは家族みたいなものだ、とおっしゃっていた。何も無いところに、全国から物資が注ぎ込まれてきたことへ「感謝している。」ということもおっしゃっていた。

「震災前と後で人々の意識はどう変わったか。」という質問に対して、「震災前は、高台にいる人は避難訓練をしなかったが、震災後は高台にある小学校や仮設住宅でも、もっと高いところへの避難訓練を行うようになった。」とおっしゃっていた。

東北へ行かなくてもできることとして、「被災地のことを想って自分自身の時間に還元する」ことが回りまわって支援となるとおっしゃっていたことが印象的だった。工藤さんは、「懐かしさ」や「その土地の文化」が防災に繋がるということもおっしゃっていた。

私たちは、「自分たちの住んでいる町、地域の特徴」、「地域の人々が団結し、地域の中でコミュニティを形成すること」が大切な防災となると考えた。



⑪ 8月20日（木） <南三陸町ボランティアセンター・さんさん商店街>

宮城県南三陸町での漁業支援作業

南三陸町のボランティアセンターにお世話になり、漁業支援として佐藤さんと佐々木さんが行っている昆布結びとホヤ漁に用いる縄のゴミ取りを行った。

普段することがない活動で、楽しんで行うことができた。作業部屋の中には全国各地から届いた手紙や写真があり、宮城と全国の繋がりや人との関わりを大切にしている佐藤さんや佐々木さんの人柄を知ることができた。

佐藤さんのお話の中での「ものは流されても、頑張る心は流されていない。」という言葉が印象的で現地の方々の生きる力を感じた。



さんさん商店街

南三陸町にあるさんさん商店街に訪問し、班員それぞれ写真集や T シャツを買って直接的な復興支援を行った。



⑫ 8月21日（金） <面瀬小学校>

小学生との交流

被災地の子供たちとの交流を図ろうと気仙沼市にある気仙沼市立面瀬小学校に訪問させていただいた。

まず、私たちに交流の機会を与えてくださった面瀬小学校への感謝の気持ちを込め、草取りや窓掃除等の清掃活動を行った。作業中に子供たちから私たちに寄り添ってきてくれたので予定を早めてグラウンドでサッカーや花一匁等をして遊んだ。昼食を子供たちと一緒に取り、午後からは体育館をお借りしてドッジボールや鬼ごっこ等で交流を深めた。その後おやつの中には私たちが持参してきたお菓子を一緒に食べながらクイズ大会をして楽しんだ。

子供とふれあう機会が普段ないメンバーがほとんどで不安があったが、子供たちの元気のおかげで楽しむことができ、助けられた。また、私たちが帰る時には姿が見えなくなるまで手を振って見送ってくれて嬉しかった。



先生方からのお話

先生方から震災当時のお話を聞く機会があり、その中で地震発生時の子供たちの誘導が甘かったというお話が印象に残っている。3月9日、東日本大震災の2日前にあった三陸沖地震で津波注意報が発令され気仙沼には0.2mの津波が来た。予測値では0.2mよりも大きな津波が来るとのことだった。このことが少なからず影響し3月11日の大地震後、津波が来ると分かっていたが高台へは避難させずグラウンドへ避難させた。幸いにも被害者はでなかったが、もしも子供たちが飲み込まれてしまっていたらと深く考えさせられたようだ。

このお話を聞いて、まだ地震や津波への知識が乏しい子供たちに私たち大人がきちんと誘導していくことが大切だと感じた。



⑬ 8月22日（土）＜語り部ガイド・南三陸町 平成の森＞

語り部バス研修

南三陸町で語り部をされている後藤一磨さんにお世話になり、バスを使い震災で被害を受けた場所を巡った。大きな被害を受けた南三陸町立戸倉中学校に行き当時のお話をしてもらった。戸倉中学校は海がすぐそばにあるが海拔 11m にあるため避難場所に指定されていた。そのため、地震発生後は地域の住民や学生たちがグラウンドに避難していた。堤防をはるかに越える津波が押し寄せ、グラウンドはおろか校舎の一階部分を飲み込んだ。戸倉中学校では 20m を超える津波が押し寄せ生徒 1 名、教師 1 名が犠牲となった。震災の翌日の 3 月 12 日には戸倉中学校で卒業式が予定されていたことが職員室の黒板に記されていた。正面玄関のような場所はベニヤ板で応急処置をしたような状態で残っていた。今では戸倉中学校の前には仮設住宅が建っている。このように東日本大震災での被害のほとんどは津波によるものだった。しかし、この津波は全てが悪い影響を残したものでは無かったそうだ。津波によって海に沈んでいたヘドロが綺麗になり海が 50 年若返りワカメやウニといった海産物が豊富に育ったという。お話を聞いていくなかで、自分の命は自分で守るという意味をもった「津波てんでんこ」という言葉が印象に残った。

南三陸町 平成の森にて小野寺寛さんの講話

NPO 法人未来南三陸まちづくり事業部長の小野寺寛さんにお世話になり講話を聞かせていただいた。

小野寺さんのお話は歴史的な視点から震災について語ってくださり、震災についての新たな知識を得られた。南三陸町のあたりでは約 50 年に一度大きな被害の出る津波が発生しているそうだ。このことから小野寺さんはその 50 年後にどのようにこの震災についての情報を伝えるかが大切で、このような歴史が防災を証明するものだとおっしゃっていた。

また、小野寺さんは被災地に対しての支援をする側とされる側にギャップがあると考えられていて、「支援をされる側がボランティアのためにボランティアをすることがないように、自己完結で支援を行うこと」が良いボランティアの在り方だと言われていた。この言葉は私たちが行っているボランティアについて深く考えさせられるきっかけとなった。





⑭ 8月23日（日） <気仙沼仮設住宅・石巻市雄勝町>

仮設住宅訪問

宮城県気仙沼市南最知にある南最知住宅南の東棟と西棟の二つを訪問させていただいた。初めに、このような機会を与えてくださった感謝の気持ちを込め、住宅の周辺の草取りやクモの巣除去等の清掃活動を行った。

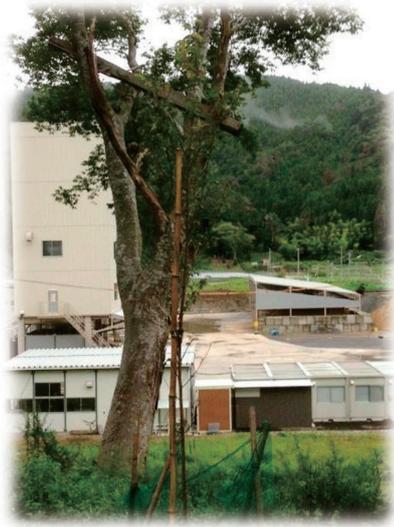
その後住民の方々と交流会を開き、持参してきた福岡のお菓子を食べながらそれぞれの方言の話をしたり、簡単な手遊び等をして親睦を深めた。その際に住民の方に出していただいた胡瓜のお漬物やホヤ貝の煮付は非常に美味しかった。非常に楽しく、穏やかな時間を過ごすことができた。

住民の方々のお話で、この仮設住宅がある場所は元々山だった場所で震災後、所有者の方が無償でさし出してくれたということを本当に感謝しているとおっしゃっていた。災害を未然に防ぐ防災に加えて、今後私たちが災害に遭遇したとしても、同じ被災者との助け合いも重要なのだと感じた。



雄勝花物語の防災教育

宮城県石巻市雄勝町にある雄勝ローズファクトリーガーデンに訪問し、徳水博志さんに「震災復興の学びのプログラム」を実施していただいた。徳水さんは地形による津波の変化の仕方や、津波と普通の波の違い等といった物理的な視点から津波について説明してくださり、津波に対する知識をより深めることができた。また、実際に被災した場所や避難した道を歩き当時の写真を用いて説明をしていただいた。海拔 20m 近くのある大木に船の残骸や木材が引っかかっている津波の被害の大きさを目の当たりにした。また、徳水さんのお話から住民と政府側の堤防建設に対する意見の食い違いや津波に対する認識の不一致等の課題も見えた。



4 被災地での活動報告 ～ 精神的ケア班 ～



被災した中浜小学校

⑮ 8月19日（水） <面瀬小学校>

この日、私たちは気仙沼市立面瀬小学校を訪問させていただいた。小学校は夏休みのため学童の子どもたちと遊んだ。カレーを一緒に作ったり、外でサッカーや鬼ごっこをしたりして一日を過ごした。最後には手紙を書いてくれる子供もいた。



いまだに仮設住宅に住んでいる子どもも少なからずいたり、子どもたちからポロっとこぼれた震災の時の話などを聞いて、震災の悲惨さを改めて実感した。子どもたちの目線から見た震災の様子、子どもたちがどのように捉えているのかを少しではあったが感じ取ることができた。

薬学部1年 岸由美子

⑩ 8月19日（水） <民宿つなかん>

私達は震災の被害を大きく受けた民宿のつなかんに宿泊させていただいた。つなかんははじめ、今の女将さんの自宅であった。しかし震災が起き、学生ボランティアの宿泊先として利用されたのがきっかけで民宿を始めたとのことであった。震災当時の貴重な写真やお話を聞くことができ、大変よい学習をすることができた。



つなかんは実際に津波の影響により、波が3階まで襲ってきて全壊した。その当時の写真を見て、私は改めて震災の悲惨さ、恐ろしさを感じた。泥だらけで壁も流されてしまった建物を今の姿まで復元できたのは現地の方やボランティアの方々の協力や支えがあったからこそだと思う。最悪な状況になっても皆で力を合わせてここまで復興できたことにとっても感動した。またつなかんの女将さんは明るく気さくな方で大変元気をもらいこれからの活動も頑張っていこうと思った。

スポーツ科学部2年 村上静香

⑰ 8月20日（木） <気仙沼仮設住宅訪問>

反松公園仮設住宅、岩ヶ崎仮設住宅の2班に分かれ、ボランティアセンターの方々と集会所の周辺の窓ふきや掃除をした。その後、仮設住宅に住まれている方とお茶会をしながら交流をした。

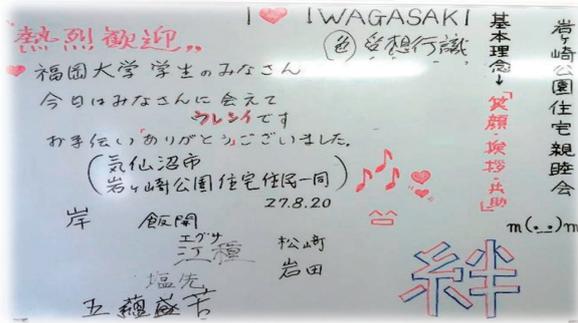
・反松公園仮設住宅



被災したときのことを詳しく話してくれる方もいれば、気仙沼のいいところを話してくれる方など、様々な話を聞くことができ、どれも私たちにとって貴重なものとなった。実際に直接お話を伺うことで自分がどれだけメディアの情報によって先入観を植え付けていたかがはっきりし、またメディアの情報では知ることのできなかつた話なども聞くことで改めて震災のことについて考え直すきっかけになった。一人ひとりが震災での被災の仕方も違い、思いや考え方も違う中でのお茶会での交流はとても有意義なものとなった。

人文学部2年 小川浩貴

・岩ヶ崎公園仮設住宅



私たちが温かく迎えてくださり、震災の話から人生における上手な生き方など、いろいろなお話をしていただいた。仮設住宅の現状は地域によって差があるなど、まだまだ厳しい状況に置かれているという現実はあるものの、仮設住宅ではみんなが積極的に協力し合って一歩ずつ前に進んでいる姿が、お話を聞いていてひしひしと伝わってきた。

法学部 2年 塩先紗弓

抽選で入居が決まる仮設住宅。公平だが、その抽選によって地域住民がバラバラになったという話が印象的であった。それによって、一日中部屋で過ごし、認知症の方が増えているとのことであった。今後若い世代が家やマンションに移住をし、この問題は深刻になると感じた。自分にできることがほとんどないことがもどかしくもあったが、自分の目を感じ、知り伝えることが今できることであると感じた。また、公平であると思っていることの中にも問題があり、天秤にかけることの大切さを感じた。私たちを受け入れてくださった岩ヶ崎仮設住宅の皆さんありがとうございました。

薬学部 5年 岩田瑞希

⑱ 8月20日（木） <石巻語り部研修>

石巻市の語り部研修では、ガイドさんの案内のもとバスで被災地を巡った。



津波の被害にあった場所は、瓦礫は撤去されていたが、撤去された場所そのまま放置され、腰ぐらいまで高さのある草が生い茂っており、もともとそこでたくさんの方が生活していたということが信じられないくらい、あたり一面が緑に覆われていた。津波によって橋が切断されており、所々残っている家も建物の一階部分は津波によって流されていた。ガラスなどは割れたままになっていて、まだ新しい建物などは建つ気配はなく、復興が進んでいるとはいえない状況であった。

また、報道ではなかなか知ることができない話などを語り部の方から聞き、被災地の現地に立つことで被害の現実を目の当たりにし、自分たちにできることは何なのか深く考えさせられた。

法学部 2年 飯開まみ

①9 8月21日（金） <山元町語り部研修>

山元町にある津波を受けた橋元商店の倉庫を改装し作られた写真館「BRIDGE～みんなの写真館～」にて、桜美林大学の学生3名と合流し、山元町の震災前後や復興の状況を写真とともに学んだ後、やまもと語り部の会「山元案内人」のお二方と実際に山元町内を巡りつつ、被災当時の町の状況や避難の体験談をお話いただいた。

当時、町民が避難した高台からは、広範囲に建物のない海岸沿いの土地が見えた。津波は高台の上まで来たため、大木にしがみついてどうにか助かった方も居たという。また、多くの生徒や職員が津波の恐怖にさらされながらも、多くが助かった中浜小学校は、外から見学し、一階部分は窓枠さえも折れ曲がり、教室があったと示せるようなものは黒板と棚ぐらいしか残っていなかった。屋上付近の壁にはくっきりと津波の跡が残されていた。



今まで、調べた情報のみで、私達にはあまり現実味の無かった現地の被害の大きさを改めて痛感させられた。語りのなかの、子供達が当時の厳しい状況下でも自分にできることを積極的に行っていたという話に感銘を受け、同じ状況下に置かれた場合、果たして自分はそのように活動できるだろうかと、深く考えさせられた。語り部の方は、涙をこらえつつ、自分の体験をお話しされていて、辛いことにも関わらず伝えようとされている姿勢に、何か胸に響くものを感じた。

法学部2年 松島英里奈
薬学部2年 竹下舞夏

⑳ 8月21日（金） <山元いちご農園>

山元いちご農園の岩佐社長に直接、どういう経緯で農園ができたのか、現在の農園の活動について、今後の課題等をお話していただいた。質疑応答では震災当時の問題点等、疑問に思っていたことを丁寧に答えていただいた。

また、栽培に使う土をほぐす班と給水ホースの設置をする班に分かれ、実際に作業をお手伝いさせていただいた。



震災後、風評被害と闘いながら、土や水にもこだわって、それにも負けない商品づくりや、マカロンやワインなど、新たな販売促進企画を立ち上げていて、苦しい状況のなか、前を進み続ける姿勢に敬意を覚えた。また、復興・発展における企業努力や、一つ一つの作業の大変さ、作物へのこだわりを知るとともに、自分たちも日々の努力を重ね、一日一日を大切にしていきたいと感じた。

法学部2年 松島英里奈

薬学部2年 竹下舞夏

②1 8月22日(土) <山元町工房地球村>

24時間テレビのイベントの手伝いをを行った。会場の準備、交通整備、販売の手伝いをしたり、時にはイベントの参加者となって会場を盛り上げた。



ステージやレクレーション、出店などがある中で、自分たちができることは、イベントを盛り上げることという思いで活動した。レクレーションのイントロクイズに参加したり、一緒に『恋するフォーチュンクッキー』や『フラダンス』を踊ったりした。イベントの合間に、地元の方とお話もできて、現地の声を聴くことができた。一日終わって、地球村の皆さんや来場者の方々に喜びの声をいただけたので、少しでもお役に立てたのではないかと思った。

法学部 3年 荒木賢一

イベントの手伝いを通して、現地の方と触れ合い、現在の復興の状況を肌で感じる事ができた。時には、イベントに参加して現地の方々と一緒に盛り上がり、喜びを共有することができた。現地の方々の笑顔を見ることができ、少しでも復興のお手伝いができたのではないかと思う。地球村での活動は一日だけだったが、東北の方々の温かみを感じることができた。

理学部 2年 荒巻昂

イベントの主な手伝いは駐車場の案内であったが、現地の方の思いに触れて障害を持つておられる方のレクリエーションの手伝いやフラダンスなど様々な体験をさせていただいた。瓦礫撤去などが終わった現在、ボランティアができる事はごく少数ではあるが現地の方から「被災地の事を思って来てくれるだけで嬉しい。」という言葉がいただくことができた。数々の障害を乗り越え、笑顔を絶やさずに真摯に復興に向き合う被災地の方の姿が印象的であった。

商学部 3年 寺田一輝

② 8月23日（日） <町役場仮庁舎>

イベントの設営から始まり、それぞれ受付、会場での募金活動、募金で集まった小銭を用いてのコインアートの作成に参加をした。また、山元町の方々と触れ合いを兼ねて山元音頭を踊るなどし、地域の方々との協力し、触れ合い多くのことを学ぶことができた。



地域の方々の会話の中で、震災以前は自分たちの財産であったものが、震災によって瓦礫と呼ばれるようになってしまったこと、数年前まで隣近所に住んでいて毎日顔を見合わせていたのに、今はどこで何をしているか全く知らないことなど、私たちの想像を超える多くの悲しみを知った。また、助け合い、前向きに生きてゆく方々をそばで見て本当に元気をいただいた。

経済学部 3年 横山ひかり

それぞれの学生が自分の割り当てられた役割を務めるだけでなく、現地の方々との触れ合いの時間を大切にしつつ、イベントを盛り上げる手伝いがあった。その中でお互いに、元気をもらうことができ、貴重な体験になった。

医学部 1年 松崎夏生

5 各リーダー総括



南三陸町防災対策庁舎跡地

東日本復興支援プロジェクトを振り返って

全体リーダー

法学部3年 岡村 啓汰

私は、震災から4年半という月日が経過したが、東北のために何かできることはないかという思い、また、現在教員を目指しており将来の教え子たちに自分の目で見た東日本大震災について伝えたいとのことから参加を決意した。

震災当時からマスメディアを通し、被災状況、現地の状態、復興状況について情報を得ていたが、実際に訪れ、見てみると想像をはるかに超えた現状があった。もとは街であった場所には建物などは何もなく、盛り土があたり一面に広がっていた。被害の大きさを改めて実感するとともに、現在の復興状況に驚きを隠せなかった。確かに、復興が遅れているということは聞いていた。しかし、実際に目で見てみてマスメディアが報道すること以上にこのことは大きな問題であると感じた。

また、現地の方々と接する機会も多くあり現地の方々の思い、被災地の生の声を聞くことができた。その中で多くの方が口にしていたことがある。それは、「震災について風化させないでほしい」ということだった。プロジェクトに参加したほとんどの学生が聞いた言葉であると思う。直接的なボランティアだけでなくこの経験を伝えていくこともとても必要なことであると強く感じる言葉であった。

この東日本復興支援プロジェクトでは、笑顔が多く見られた。活動当初、被災された方々を思うとどのように接したらよいのか考えることがあった。しかし、現地の方々はとても明るく、そして強く生活をされていた。ともに活動をする中で私たちが元気をいただくことも多くあった。復興はまだこれからであるが、現地の人々は常に前を向き、大きく進んでいるということも実際に訪れ、関わりを多く持つことで感じることもできた。

今回の東日本復興支援プロジェクトには、48名の学生がそれぞれの思い、目的を持って参加をした。私自身を含め、多くの者が震災後初めて東北を訪れた。各班での活動が主であったため全体に目を向けることは少なかったが、一週間の活動終了後の全学生を見ると、充実感に満ちた表情を感じ取ることができた。一人一人がこの一週間で大きな経験をする事ができたのだと思う。もちろん、今回の活動で何かを大きく変えることはできない。しかし、まず行動を起こすことの大切さを実感した。今回の経験を皆、今後につなげ活かして行ってほしい。また、今回だけの活動にとどめるのではなくボランティア、その他の活動にも積極的に参加し、自発的に行動を起こしていくことが東日本復興支援プロジェクトに参加した意義であると思う。

震災から今 ～既知の未知～

地域創生班リーダー

人文学部1年 永田 翔一

2015年8月中旬、私は東日本復興支援プロジェクトに参加させていただき、南三陸町、石巻を中心に活動を行った。そもそも私がこのプロジェクトに参加した理由は、震災当時から現在までニーズが変わり、様々なかたちでボランティアが行われている今、そして自分が大学生になった今、テレビ等で現地のためボランティアをしている同世代の若者を見て刺激を受け現地の支援を自らの手で直接的に活動したいと感じたからである。また私が今まで知っていた東日本の状況はテレビのニュースやインターネットのメディアのみでの情報だったので現地に行くことで自身の目で見て感じる事が出来るチャンスであった。

民泊体験では、地域とのつながり、人とのつながりの重要性を学んだ。また民泊体験のお別れのとき初めて耳にしたのがご家族を津波で亡くしたということだった。そのようなことがあったのにもかかわらず現地の方々は私達を快く受け入れてくださった。また漁港では震災当時の状況を詳しく話していただいた。ニュースや新聞で受けたものを理解しているつもりでいたが実際の状況はかなり違っていたことを認識した。更に津波による被害で町ごと流されてしまったが、海からの幸をいただいている以上海と共生しなければいけない、そしてこの町の未来のために立ち上がり一歩でも前に進まなければという気持ち、何にでも立ち向かう強い気持ちをまじまじと感ずることができた。しかし、その一方で若者の人口流出の問題やさんさん商店街でお話を聞かせてもらった商店街の移転における商店の継続の難しさや利用者の減少、金銭的問題、まちづくりの問題などまだ課題は山積みであるそうだ。南三陸、石巻を訪れた際は大型の重機があちこちで忙しく動き、盛り土のかさ上げを行っている姿を目の当たりにした。私たちが日頃目にする田んぼ、スーパー、コンビニ、公園はなく、さらには家も土台のコンクリートのみが残った状況であった。南三陸町ボランティアセンターでお世話になった長さんの話では4年経っても街灯はなく、まだ前のような生活ができるようになるには相当な時間がかかるというようなことが現地に行っ

て分かった。私たちがこの活動を終えて感じたのは、ボランティアはどんな形でもできる、そして自らの目で見ただけのものには力があるということ。それを少しでも伝えつなげていくことが我々の使命だということ。まずは身近な人から伝え、少しでも風化を食い止め、支援の数が増えれば自分たちがしたことの意味が見いだせるのではないかと思う。

最後に、私はリーダーとして力不足なところが多かったが、協力してくださった先生方、班員に深く感謝したい。そしてこれからも何らかのかたちで活動を継続していきたい。

二つの震災

防災班リーダー

工学部2年 栗原 瞭

2011年2月22日、東日本大震災のおよそ3週間前のこの日、私はニュージーランドのクライストチャーチという場所にいた。この日の12時51分、地震が起こった。マグニチュードは6.1、最大震度は6強という非常に大きな地震だった。この時私は中学校の語学研修旅行としてニュージーランドを訪れていた。幸い私たちはとある建物の中に居て全員が無事だった。その後約1週間におよぶ現地での避難生活は想像をはるかに越えた辛さだった。この震災が地震への考え方や、防災への意識を大きく変えた一番のきっかけだった。そんな中、今度は東日本大震災が起こったのだ。当時、報道での東日本大震災の映像を見るとニュージーランドでの地震をフラッシュバックのように思い出し動悸が激しくなったこともある。しかし、この東日本大震災で私以上に辛く厳しい体験をされた方々がたくさんおられると考えると私自身のことがかっぽけに感じ、復興が完全に終わるまでしっかりと関わっていかなければならないという使命感のようなものも同時に感じた。だが、当時中学生だった私は支援金という形でしか関わることができず、現地に赴くことはできなかった。なので、今回この復興支援プロジェクトに参加することに至ったのだ。

現地ではメディアからは伝わってこない被害の爪痕や、現実では考えられないような壊れ方をした建物など、想像をはるかに越える被災地の現状があった。その中でも一番驚いたのは復興がこんなにも進んでいないのかということだった。メディアで触れられる機会が減ってきていたため復興はある程度進んでいると思い込んでいた。

第1次派遣隊のときからお世話になっている上山八幡宮で宮司をされている工藤真弓さんはメディアでしか現地の状況を知らない人に、津波でなくなった町ではなく繋がりが生まれた町なのだということを伝えたいとおっしゃっていた。工藤さんのように被災地の住民の方々は決して視線を落とすことなく前を向いていた。完全なる復興はまだ先になってしまうかもしれないが、私は微力でも東北の復興に協力していきたい。たくさんの方々のお話の中で被災地に対しての支援をする側とされる側にギャップがあると考えた。また「支援をされる側がボランティアのためにボランティアをすることがないように、自己完結で支援を行うこと」が良いボランティアの在り方だと言われている方がおられた。この言葉は私たちが行っているボランティアについて深く考えさせられるきっかけとなった。

復興とは「人との繋がり」が大きなキーワードとなり、この「人との繋がり」を子供たちの世代にもつなげることが重要だ。私たちが東日本大震災から学んだ多くのことをたくさんの人につなげ、次へ活かさなければならない。

今回、東日本復興支援プロジェクトに関係してくださった方々に厚く御礼申し上げます。本当にありがとうございました。

一週間で得たもの

精神的ケア班リーダー

法学部3年 手島直紀

私は今回の東日本復興支援プロジェクトで初めて宮城県を訪れた。私がこのプロジェクトに参加した理由は少しでも人の役に立ちたいという気持ちもあったが、一番の参加の決め手になった理由は、現在復興作業が進んでいる現地に行き、見て、聞いて、感じることで自分自身の成長に繋がるのではないのかと思ったからだ。

震災から4年の月日が流れ東北に行く前までは、ある程度復興は進んでいるのではないのかと思っていたが、実際はそうではなかった。

活動として東北について1日目に南三陸町にある上山八幡宮に向かっている道中見渡す限り更地は続いており、「なぜこんなに復興してないのだろうか。」というのが率直な感想だった。上山八幡宮では工藤さんの実体験を紙芝居と講話で聴き、震災遺構の防災庁舎へ行き震災が与えた影響は想像もできないものと感じた。

2日目以降班行動になり、私たちの班は面瀬小学校へ行き学童保育に通っている子どもたちとカレーを作って食べたり一緒に外でサッカーしたりして一緒に遊び、逆に自分たちが元気をもらいこれから続いていく活動の原動力になった。

その日の夜、民宿の「つなかん」に宿泊させてもらった。女将さんが朝、震災に遭ったときの話をしてくれたときに「世界中ではもっと悲惨なことが起きているのだから、東北の被害はまだまだと思って毎日を過ごした。」とおっしゃっていたのが印象にある。写真を見せていただいたり、お話を聞くことができ内容の濃い時間を過ごすことができた。

3日目、午前中に仮設住宅の清掃のお手伝いをさせてもらった後お茶会をして交流させてもらい、震災に遭ったときの話など様々な話を聞き班員有意義な時間を過ごすことができた。午後からは石巻の語り部研修に参加させてもらった。その中で自分自身印象に残っているのは「がんばろう！石巻」と書いてある看板と地面に大きく「復興するぞ！」と記してある献花台に行ったことだ。並々ならぬ強い意志みたいなのを強く感じ復興にむけて自分たちも全力で頑張ろうと思えたのを覚えている。

4日目以降山元町で活動をし、山元町での語り部研修、山元いちご農園の岩佐社長の講演、農作業、24時間テレビのイベントのお手伝いなどいろんなことをさせてもらった。どの活動もよく、全員でイベントに参加し、町の方と交流し、人の温かさを感じることもできた。

一週間を通して自分自身、そして班員全員が成長できたと思っている。震災があつて4年月日が流れ、風化させないことがこれから大事になっていくと思う。そのためにもこの一週間で経験したことを伝え、また継続的に活動していかなければならないと感じた。

6

ご支援、ご協力いただいた方々

南三陸町 いりやど 様
南三陸町 上山八幡宮 様
南三陸町 ボランティアセンター 様
南三陸町 観光協会様 および 民泊体験にご協力いただいた皆さま
南三陸町 ホテル観洋 様
南三陸町 さんさん館 様
南三陸町 夢未来南三陸まちづくり事業部 小野寺 様

気仙沼市 社会福祉協議会 様
気仙沼市 岩ヶ崎公園住宅の皆さま
気仙沼市 反松公園住宅の皆さま
気仙沼市 南最知住宅(西)の皆さま
気仙沼市 南最知住宅(南)の皆さま
気仙沼市 面瀬小学校なかよしハウスの皆さま
気仙沼市 唐桑御殿つなかん 様

石巻市 雄勝花物語 様
石巻市 ピースボート災害ボランティアセンター 様
石巻市 石巻専修大学の皆さま

山元町 山元いちご農園 様
山元町 工房地球村の皆さま
山元町 山元町役場の皆さま

東北学院大学の皆さま
株式会社JTB九州 福岡大学店 様

この他、多くの方々のご協力をいただきました。謹んでお礼申し上げます。

⑥ ご支援、ご協力いただいた方々

平成27年度 東日本復興支援プロジェクト
活動報告書

平成28年 3月 発行

発行 福岡大学学生課
福岡市城南区七隈八丁目19番1号
TEL 092-871-6631 FAX 092-873-2981
